大地に歌は消えない

ウイリアム・H・アームストロング作
清水真砂子訳

DAINIPPON
JUNIOR BOOKS

大日本ジュニア・ブックス〈フィクション〉

NDC 933
ウイリアム・H・
アームストロング
William H. Armstrong
清水真砂子訳
大日本図書 昭和50年
(1975)
184P. 22cm (大日本ジュニア・ブックス〈フィクション〉)

大地に歌は消えない

著者 ウイリアム・H・アームストロング
訳者 清水真砂子
発行者 佐久間裕三
発行所 大日本図書株式会社
104 東京都中央区銀座1—9—10
電話 (03) 561－8671～9
振替 東京 9—219 番
印刷所 株式会社 金羊社
製本所 株式会社 宮田製本所

1975年8月20日 第1刷発行
1981年7月10日 第6刷発行

●清水真砂子（しみずまさこ）
1964年静岡大学教育学部英語科卒業後，英米児童文学の研究・翻訳に従事。1974年評論「石井桃子」(『講座 日本児童文学 第8巻』所収) により，日本児童文学者協会新人賞受賞。おもな著訳書に『英米児童文学年表 翻訳年表』(共著 研究社)『大きいゾウと小さいゾウ』(ヒューエット作 大日本図書)『かぎっ子たちの公園』(アレン作 大日本図書) などがある。日本児童文学者協会会員。

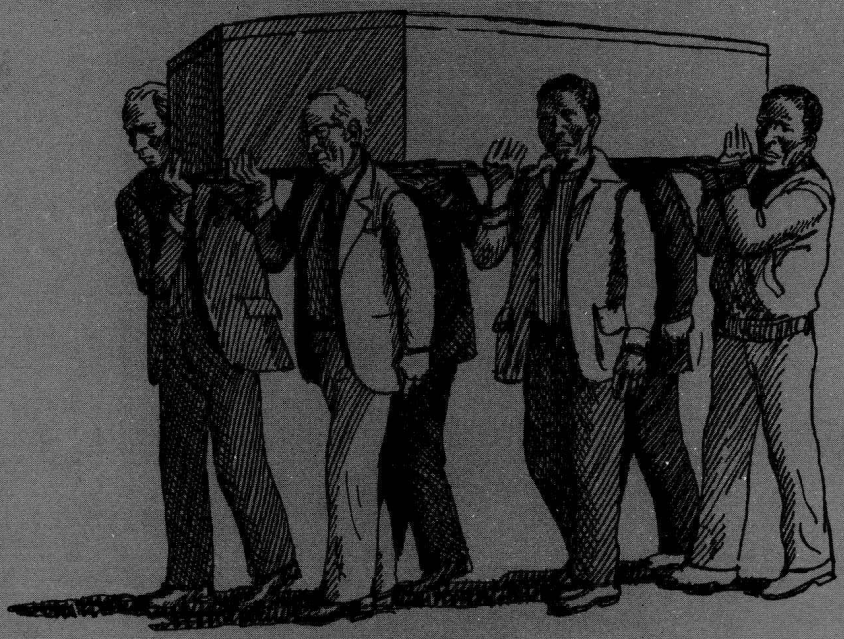
●太田大八（おおただいはち）
1918年長崎県生まれ。1943年多摩美校卒業。1955年日本童画会賞受賞。1958年小学館絵画賞受賞。1969年国際アンデルセン賞国内賞受賞。1970年国際アンデルセン賞大賞次席。おもな作品に『馬ぬすびと』(平塚武二作 福音館書店) 創作絵本『まほうこうじょう』(大日本図書) などがある。日本イラストレイター会議，児童出版美術家連盟所属。

もし乱丁・落丁の本がお手もとに届きましたら，お手数でもご返送ください。取り替えさせていただきます。

日文 701707428

人間は消えない

ウイリアム・H・アームストロング作
清水真砂子訳



DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
fiction

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

大地に歌は消えない

ウイリアム・H・アームストロング
清水真砂子訳
太田大八画

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

SOUR LAND

Copyright © 1971 by William H. Armstrong
Japanese translation rights arranged with Harper & Row,
Publishers, Inc. through Japan UNI Agency, Inc.

装幀・太田大八

善き人は、その境遇から自由である。いかなる不幸に遭遇しようと、それ故に人が変わるということはない。

――マルクス・アウレリウス

1

「ねえ、パパ、どうして片っぽうは共同墓地っていって、片っぽうは霊園っていうの？」

デイヴィッド・ストーンがたずねた。一家は自分のうちの牧草地のはずれにきて、足を止めたところだった。牧草地の柵に直角に、針金をはった高い囲いが丘のはるか下のほうまでのびていた。

「片っぽうは黒んぼで、片っぽうはぼくら白人がはいるからだよ。」

ジョナサンが父親の返事を待たずにいった。

「だけど、どっちもお墓なら、どうして片っぽうはあんなに草ぼうぼうで、片っぽうはきれいになってるの。」

三番めの子どもが聞いた。この子はルースといった。末の女の子で、まだ五歳、いつでも最後

にならないとものはいわせてもらえない。デイヴィッドは八歳、そしてジョナサンはそれより一歳半年下だった。

「人ってのはいろんな呼び方がしてみたいのさ。」父親がルースの質問には答えず、いった。「だが、そのうち、両方ともきれいになるだろうよ。ほれ、あの人があの草刈り鎌をほうり出しさえしなけりゃな。」

父親は丘をすこし下ったところで草刈りをしている人かげを指さした。

デイヴィッドがまた口を開きかけた。が、父親がそれを押さえた。

「しっ、見てみろ、あの鎌の使い方を。まったくみごとじゃないか。」

アンソン・ストーンの立っているところは高台だった。ジープ道はここでカーブして、その先の彼の畑へと続いていた。アンソンは丘の斜面を見つめて、じっと立っていた。ルースはさきほどの答えをまだ父親からもらっていないこともわすれて、いつか、年をこしたアキノノゲシの綿毛を風に飛ばすのに夢中になっていた。ジョナサンは細長い一本の棒をつぎつぎと折っていって、もう十本あまりの棒切れをこしらえていた。デイヴィッドは父親そっくりなかっこうで、考え深そうな顔をして立っていたが、ただ、ポケットにつっこんだ片方の手は、二枚刃のジャックナイフをそっとまさぐっていた。これが持てるということは、もう〝子ども〟ではないというこ

とだった。

ところで、ふたつの墓地は静かな同じ丘の斜面にならんでいたが、ふたつをしきる異様に高い柵は、競技場の特別観覧席か大庭園の柵を思い出させた。個人住宅の屋敷のまわりにもよく見かけるもので、そういう家の住人で、犬や他人の子どもにもやさしい人はまずいない。彼らはそんなへいをめぐらして、自分たちは冷酷な人間です、と世間に向かって明言しているのだ。ふたつの墓地をへだてる柵は丘を下って、はるか下の教会と寺男の家にまで達し、寺男の家の野菜畑の角のところで終わっていた。荒れ放題の共同墓地の入り口は、その野菜畑のはずれにあったから、墓地にはいろうと思ったら、寺男の家と教会をすぎ、さらにその向こうの川の浅瀬を越えなければならなかった。

アンソン・ストーンはこれまでもときどき自分の牧草地の柵を乗りこえて墓地にはいり、小さな墓石に刻まれた名まえや墓碑銘などを読んでいた。墓石は店で買ったものもあれば、手製の型板にセメントを流しこんでつくっただけのものもあり、ちゃんとした角材を使った十字架もあれば、ニセアカシアの木をけずって組んだだけのものもあった。マーモットがそんな十字架の下にあちこち穴を掘り、おかげでたくさんの十字架がたおれて、雑草や野イバラのかげに人知れずころがっていた。店で買った墓石には、たいてい、寝そべっているか、羊飼いの少年に抱かれるか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

した羊が彫ってあり、そうでなければ、オリーブの枝をくわえて、舞っているハトとか、雲に乗った天使のすがたが彫ってあった。ある石には天使がふたり彫ってあったが、うちひとりは髪を短く刈りこんで、ひざ丈の着物を着、もうひとりは、長いひきずるような着物をまとって、髪を風になびかせていた。

だが、家でつくった手製のものにせよ、店で買ったものにせよ、墓石にはどれも、何かことばが刻まれていた。手製のものには、「おそれず、安らかに眠れかし。」などといった短い文が多く、市販のものにはもっと長いものが目だった。けれども、どれをとってみても、その文面は黒人の彼らが仕事中にうたった歌だとか、集会所で唱えた祈りの文句からひっぱってきたものばかりだった。それは、たとえば、こんな文句だった。

「主、我を召されるは、御胸に子羊を抱かんがためなり。主は天にましますなり。主は愛するものに眠りを賜わるなり。汗して働きし者の眠りは安らかなり。われ暗き日に追われしところにわが羊を見出さん。

初めのうちこそ、アンソン・ストーンは、ただ興味本位に墓碑銘を読んでまわっていたのだが、このごろはちがっていた。墓碑銘を読んだあとは、農作業にもどっても、作業を終えて家に帰っても、なぜかいつまでも心が暖まっていた。彼はそれがうれしくて、くり返し、くり返し、

読んでまわるようになっていた。しかし、今、墓地にいる男にひかれたのは、まったくの好奇心からだった。彼は見たこともない黒人が、まるで音楽にでも合わせているかのように、みごとに草刈り鎌をふるうのに、すっかりおどろかされたのである。

墓地の遠いすみにはすでに大きなそだの山ができているところを見ると、この黒人はあらかじめ墓地に来て、草刈りのじゃまになりそうな若木などは切っておいたのにちがいない。おかげで、黒い手ににぎられた大きな草刈り鎌は美しい弧を描いてリズミカルに動き、行く手のものをつぎつぎとなぎ倒していくのだった。

鎌は右から左へ大きく動いても、鎌を持つ男のほうはほとんどからだを動かさなかった。振り始めだからといって、大きく腕をのばすわけではなく、振り終わって、ぐっと手前に引くでもなく、とちゅう、つまずいてあわてる、といったしぐさもなく、鎌はまるで機械のように規則的に動き続けるのだった。聞こえるものといえば、シュッシュッという草刈りの音ばかり。鎌が墓石のすぐそばの草にのびたときでも、石にぶつかるような音はひとつとしてしなかった。まるで刃の先が指のようにのびて、あたりに生えているものは何でも引きこんでしまうかのようだった。

ライラックのしげみのてっぺんから、とつぜんネコマネドリが一羽飛び立った。そのしげみは、男が鳥の巣のあるのを知って、まるく刈り残しておいたものだ。と、こんどは一羽のスズメ

が十字架とヘビノボラズの木とのあいだではばたいた。ヘビノボラズのまわりも、やはり男は刈り残してあった。

デイヴィッドは父親をまねて立っているのにあいて、一家が飼っているコリー犬を呼ぶと、先にたってかけだし、やがてジープ道のカーブをまがって、見えなくなった。牛を連れに行ったので、一家がここまでやってきたのも実はそのためだったのだ。ジョナサンはさっきから短い棒切れをつぎつぎと投げては、何本がジープ道から数メートル下の牧草地の柵を越えるかためしていた。ルースもこの小さな兄をまねることにした。だが、棒切れでは無理だと考えたのだろう。彼女が手にしたのは小さな石ころだった。石は、柵をはるかに越えて、墓石にぶつかって、大きな音をたてた。黒人の男のすぐそばの石だった。

男はゆっくりと顔をあげた。その表情があまりにもおだやかだったので、アンソン・ストーンは、自分たちがそばまできていることに、この男はとうに気づいていたにちがいない、と思った。もし、そうでないとしたら、自分にむかって石が投げられることを、特別のこととは受けとっていなかったことになる。

「いや、悪いことをしました。すみません。」アンソン・ストーンは上から大声であやまると、道をそれて、柵のほうにおりていった。「娘は兄貴に負けまいと思ったようなんですが、投げた

のが平たい石だったもんで、思いがけなく遠くまで飛んじまって……。娘もすまんことをしたと思っています。すみません、ほんとうに。わしはあんたが鎌をふるうのを立ち止まって見とったんです。こんなみごとなふりようは初めてだもんで。」

ルースはおそろしさにふるえて立っていた。まっ黒なあの男の人は、あのギラギラ光る鎌をもって、パパにおそいかかってくるのではないのかしら、と彼女は生きた心地がしなかった。どうして男の子のまねなんかしてしまったんだろう。ルースはすぐにもジープ道をかけおり、果樹園をぬけて、家に帰りたいと思った。それなのに、パパったら、どんどんおりてって、ああ、もうすぐ、柵。パパ、こわくないんだろうか。ルースははらはらしながら見つめていた。父親はまっすぐ柵のところまでおりていったと思ったら、もうくいにもたれて立っている。黒人がその気になって手をのばせば、たちまち頭は大鎌でまっぷたつだ。ルースはジョナサンの手をまさぐって、二、三歩うしろへさがろうとした。

黒人の男は、草刈り鎌を木の十字架のひとつにたてかけると、尻のポケットから砥石をとり出して十字架の片方のうでにのせ、それから、ゆっくりと足を運んで、白人のほうにやってきた。男は歩きながら、手の甲で額の汗をぬぐった。首には大きな絞りぞめのネッカチーフがきっちりと巻いてある。髪はもう白い。その白い髪にふちどられた顔に、口もとがひときわ目だつ。つき出

て、すこしめくれあがった唇には、やさしく、おだやかな、人なつっこい微笑が浮かんでいる。
男は柵まであと二、三歩というところで立ち止まると、顔をあげてまっすぐルースを見た。とたんにその顔がいっそうやわらいだ。
「小さな女の子だって、ときには石を投げなくては……。ことに、兄さんたちがいて、はり合っていかなきゃならないときは。」
ああ、これまでなんべんパパにいわれたことだろう。「男の子と競争しようなんて、やめとけ。」って。でも、この人はちがう。この人はわたしのこと、わかってくれてる、とルースは思った。
ジョナサンもなんとなくいい気分だった。自分はほんとに〝兄貴〟なのかな、という思いが、いつも心のどこかでくすぶっていたからだ。デイヴィッドはいつだって、兄貴というのは自分ひとりだという。だけど、今、デイヴィッドは牛を連れにいってしまっていないのに、あの人はまっすぐこっちを向いて、たしかにぼくのことを〝兄さん〟って呼んだんだ。ジョナサンはいそいで路肩までしゃしゃり出た。ルースより背が高いことだって、ちゃんと見てもらわなくては、というわけだ。
やがてルースは臆病そうな笑みを浮かべて、父親のところにおりていった。
黒人の男が子どもたちに見せた態度は、子どもたちの父親のアンソン・ストーンに対しても少

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com